定温輸送パッケージについて

2018/8/21　基生研・光学解析室

バッグ2サイズx2個、蓄熱材15℃用、20℃用、25℃用、36℃用を用意しています。

＜バッグのサイズ＞

小：外寸520x320x375(mm), 荷室容積3.3 L, 品番TACPack1525FS, 蓄熱材４個必要。

大：外寸480x450x520(mm), 荷室容積7.7 L, 品番TACPack1525FH, 蓄熱材8個必要。

＜蓄熱材＞

15℃用 8個（玉井化学）

20℃用 24個（玉井化学）

25℃用 8個（玉井化学）

36℃用 4個（サンプラテック）一回り小さい

（使い方：サンプラテックHPより、玉井化学の方は使い方書いていない。）

潜熱蓄熱材-36調温方法（参考）

まず、45℃の環境下に、4～８時間程度、蓄熱材同士の間隔をあけて静置し、完全に融解して液状になったことを確認してください。次に、36℃環境下で1時間程度、もしくは室温下（20～25℃）で10～15分静置し、表面温度が36℃に落ち着いたのを確認の上ご使用ください。調温には、インキュベーター、恒温乾燥器、温蔵庫などをご使用ください。（45℃に設定可能なもの）

※棚板が設定温度より高温になる調温器は、危険ですので絶対に使用しないでください。

※蓄熱材の表面温度計測には、赤外線放射温度計が便利です。

潜熱蓄熱材-２４調温方法（参考）

◎輸送時の環境温度によって、調温方法が異なります。

≪環境温度24.5℃以上の場合≫

＊保冷目的の使用になります

4℃の環境下で4時間、蓄熱材同士の間隔をあけて静置し、完全に中身が固体(白色、不透明）になったことを確認してください。次に24℃環境下で2時間、静置し、表面温度が24℃～25℃に十分落ち着いたのを確認の上ご使用ください。

≪環境温度24.5℃未満の場合≫

＊保温目的の使用になります

３７℃の環境下で4時間、蓄熱材同士の間隔をあけて静置し、完全に中身が液体(透明）になったことを確認してください。次に25℃環境下で2.5時間、静置し、表面温度が24℃～25℃に十分落ち着いたのを確認の上ご使用ください。

◆蓄熱材の温度測定方法について

赤外線放射温度計での測定をお勧めします。